

月船禅慧の研究 其二 訓註 『武溪集』

鈴木省訓

仲秋

月色孤圓萬象明 盤山眼裏好添青 無端光境俱亾盡 此
夕何人問洞庭

仲秋

月色孤圓⁽²⁾にして、萬象明なり、盤山⁽³⁾の眼裏、好し、青を添う。
端無く、光境俱に亡盡⁽⁴⁾す、此の夕べ、何人か洞庭を問わん。⁽⁵⁾

(1)陰曆の八月。(2)馬祖の法嗣、盤山寶積の示衆に、「心月孤円にして、光万象を吞む。光、境を照らすに非ず。亦た存するに非ず。光境俱に亡ず。復た是れ何物ぞ」とある。(3)盤山寶積（不詳）馬祖道一の法嗣。幽州の盤山に住す。(4)光は照すもの、境は照らされるもの。照らすもの照らされるものという対立を無くし、能所一枚のこと。(5)湖南省北部にある中国最大の淡水湖。

又

馬祖翫時無主賓 長沙用處有疎親 吞三吐七甚巴鼻 要
見十分秋色新

馬祖⁽¹⁾、翫ぶ時、主賓無く、長沙⁽³⁾、用うる處、疎親有り。
三を吞み、七を吐く、甚んの巴鼻⁽⁵⁾ぞ、十分、秋色の新たなるを見んと
要す。

(1)馬祖道一。前号研究紀要四七頁上段にあり。(2)主は主人、賓は客人。相對を絶すること。
(3)『伝灯録』に「師、因みに庭前で月に向う。仰山云く、人々盡く這箇の事有り。只是れ用不得。師云く、恰も是。請う、汝用いよ。仰山云く、作麼生か用いん。師、乃ち仰山を踞倒す」とある。(4)『伝灯録』の授子同禅師の章に「僧問う、月未だ圓かならざる時如何ん。師云く、三箇四箇を吞却す。云く、圓かにして後如何ん。師云く、七箇八箇を吐却す」とある。(5)巴は把。つかまるところ。根拠の意味。もとは牛を御するに鼻づらを把らえるところからいう。

山行値雨寄友

枯者枯兮榮者榮 春山伐木自丁丁 行過藥嶠曾遊地 且
倚松根待雨晴

山行、雨に値うて友に寄す

枯者は枯、榮者は榮、春山伐木、自ずから丁丁⁽²⁾。

行きて藥嶠⁽³⁾曾つて遊ぶの地に過らば、且らく松根に倚つて雨の晴るるを待て。

(1)『会元』の石頭遷の章に「道吾、雲巖侍立する次、師、枯榮の二樹を指して道吾に問うて曰く、枯が是か、榮が是か。吾曰く、榮が是。師曰く、灼然として一切處の光明、燦爛にし去る。又、雲巖に問う。枯が是か、榮が是か。巖曰く、枯が是。師曰く、灼然として一切處に放つて枯淡にし去ら教む。高沙彌忽ち至る。師曰く、枯が是か、榮が是か。彌曰く、枯は他の枯に従し、榮は他の榮に従す。師、道吾と雲巖を顧て曰く、不是、不是と。」とある。(2)木を切る者。音の形容。(3)藥嶠は藥山のこと。藥山惟儼の道行ないしは性格の峻嚴高尚なことを通じて用いたもの。『会元』五の藥山章に「師、雲巖と遊山す。腰間の刀響く。巖問う、甚麼の物が聲を作す。師、刀を抽いて、舊口に斫勢を作す。」とある。

開爐

大地山河不是塵 分明露出法王身 曉來霜氣侵 趺坐 靜
撥爐灰待墮薪

開爐

大地山河、是れ塵ならず、分明に露出す、法王身。⁽²⁾
曉來霜氣、⁽³⁾趺坐を侵す、靜に爐灰を撥いて、墮薪を待つ。

(1)寒さを防ぐため、僧堂内に炬を開くこと。『敕修清規』に「十月初一日開爐」とある。(2)佛身のこと。『会元』の興教章に、「普請の次で、墮薪を聞いて省有り。偈に曰く、横落、他物に非ず。從横是れ塵ならず。山河及び大地全く法王身を露す」とある。(3)冷たい空氣。(4)まきが落ちること。たきぎをくべることか。

布薩

我昔所造諸惡業 長笛一聲人倚樓 一切我今皆懺悔 又
隨月色過羅浮

布薩

我音所造諸惡業、長笛一聲、人樓に倚る。⁽²⁾
一切我今皆懺悔、又、月色に隨つて羅浮を過ぐ。⁽⁵⁾

(1)毎月一五日・末日の二回、僧俗一堂に会し、各自の罪過を懺悔し、善法を増長することを念願する。儀式を布薩式。教団を清淨に保つためのもの。(2)『華嚴經』の「普賢行願品」の偈。「懺悔文」。(3)趙嘏の詩。(4)虛堂智愚の頌。(5)山名。広東省増城県の東にある。梅の名所。

偶成

眞如凡聖是閑語 生死涅槃皆夢言 茅宇不關春寂寞 赴
齋僧在落花村

偶成

眞如凡聖、是れ閑語、生死涅槃、皆な夢言。⁽⁴⁾
茅宇關わらず、春寂寞、齋に赴く僧は、落花の村に在り。⁽⁸⁾

(1)『伝灯録』の盤山章に「眞如凡聖、皆な是れ夢言、佛及び涅槃、並びに増語と為す。」とある。万有に遍在する根源的な実相。衆生と仏とを併称する語。(2)閑言語のこと。無用な文字言句。(3)生死と涅槃。迷界と悟界。(4)絵空事。(5)かやぶきの家。そまつな家。(6)さびしく静かなさま。(7)齋は午後の飯のこと。在家の信男信女が供養する午齋を受けるために出向くことをいう。(8)散り落ちる花。

又

須彌百億黃金土 一佛統御日當午 誰子吟嘯五十年 西
窓剪燭梧桐雨

又

須彌百億、黄金土、一佛統御、日、午に當る。

誰が子ぞ、鈴⁽⁵⁾堀五十年、西窓を剪る、梧桐の雨。

(1)『大智度論』に「百億の日月、百億の須彌山、百億の四天王等の諸天、是れを三千大千世界と名づく。是の如く等の無量無辺の三千大千世界を名づけて一佛土と爲す。」とある。
(2)黄金とは、貴重なもの、すばらしいものたえ。佛国土を黄金土という。
(3)一つにまとめて治める。
(4)正午のこと。
(5)行くさま。
(6)法華經「信解品」に「鈴堀辛苦五十余年」とある。又、ひとりてたよるものがない状態。
(6)あおぎりに降る雨。

山寺訪然公

夕陽郊外路斜通 鐘動青青黯黯中 劈佛然公尚無恙 撥
灰何敢見玲瓏

山寺に然公と訪う

夕陽の郊外、路、斜めに通ず、鐘は動く 青青黯黯の中。
劈佛の然公、尚、恙い無し、灰を撥つて、何んぞ敢えて玲瓏を見ん。

(1)ゆうひ。山の西。
(2)まちはすれ。
(3)まがりくねっている。
(4)草木がおおい茂り、まっくらである。虚堂の頌に「黯黯青青たり一望の中」とある。『会元』の丹霞章に「僧有りて到参す。山下に於て師を見る。乃ち問う。丹霞山、什麼の處に向つて去る。師、山を指して曰く、青黯々の處。」とある。
(5)『禪儀外文』に「丹霞、劈佛の手を袖す」とある。
(6)病氣。恙は憂うのこと。「無恙」とは、憂いのないことをいう。
(7)玉のように、あざやかで美しいさま。『会元』の丹霞章に「師、慧林寺に於て天の大寒に遇う。木佛を取つて火に焼いて向う。院主、訶して曰く、何んぞ我が木佛を焼き得るや。師、杖子を以つて灰を撥つて曰く、吾れ焼いて舍利を取る。主曰く、木佛何んぞ舍利有らん。師曰く、既に舍利無くんば更に両尊を取つて焼く」とある。

雪

北風吹雪斜斜 雪裏行人路轉遐 白雪不爲白雪色 勿
將白雪擬梅花

雪

北風、雪を吹く、雪斜斜、雪裏の行人、路、轉た遐かなり。
白雪、白雪の色を爲さず、白雪を將つて、梅花に擬すること勿れ。
(1)雨や雪がふりそそぐさま。
(2)道を行く人。旅人。
(3)なんとなく。
(4)なぞらえる。まねる。

牡丹

一枝濃艶露華寒 曾傍他家錦障看 今日庭前親指出 又
令王老倚闌干

牡丹

一枝の濃艶、露華寒し、曾つて他家の錦障に傍うて看る。
今日、庭前、親しく指し出す、又、王老をして闌干に倚らしむ。

(1)こつてりとしてあでやか。あでやかで美しい。
(2)光っているつゆ。つゆの光。
(3)南泉普願の俗姓は王氏といい、自分で王老師と称していた。『会元』の南泉章に「陸大夫、師に向つて道く、鑑法師、也た甚だ奇怪なり。道く、天地と我れと同根、万物と我れと一体。師、庭前の牡丹花を指して曰く、大夫、時の人、此の一株の花を見るに夢の如くに相似たり」とある。

藥師掌上安

何者是病 何者爲藥 把促一壺 不敢放卻

藥師 (掌上に一壺を安んず)⁽¹⁾

何者か是れ病、何者をか藥と爲す。
一壺を把⁽²⁾促⁽³⁾して、敢⁽⁴⁾えて放却せず。

(1) 藥師如来像の一つの形。左手に藥壺を持っている。(2) かたくにぎる。しっかりとつむ。
(3) むやみに。みだりに。(4) ほうりだす。

又

衆生無病 是稱醫王 夏求無病藥 欲獻此醫王

又

衆生に病無し、是れ醫王⁽¹⁾と稱す。
更に無病の藥を求めて、此の醫王に獻⁽²⁾げんと欲す。

(1) 『維摩經』「仏国品」に「大医王と爲す、善衆病を療^{いやす}す、病に応じて藥を与え、服行を得さしむ。」とある。(2) 杯渡の『一鉢歌』の中に「何れの処に更に無病の藥を求むるや」とある。

離雪山像

有路須出 無家何之 天上天下 巍巍如斯

雪山を離るるの像⁽¹⁾

路有り、須らく出づべし、家無く、何んが之⁽²⁾く。
天上天下、巍巍⁽²⁾、斯⁽²⁾の如し。

(1) 出山仏像。(2) 高大なさま。

又

冷坐六年 蘆芽穿膝 容易出山 沈吟三七

又

冷坐六年、蘆芽⁽²⁾、膝⁽²⁾を穿つ。
容易に山を出づ、沈吟⁽³⁾ 三七⁽⁴⁾。

(1) 『修行本起經』の「六年勤苦品」に「端坐六年、形体羸瘦^{るいすう}、皮骨相連なる」とある。(2) あしの芽。あしの芽はとがっているので鋭という。『禪林類聚』の法華拳章に「僧問う、如何なるか是れ仏、師云く、蘆芽膝を穿つ」とある。(3) 思いにふけて口ずさむ。思いをひそめ、十分検討する。(4) 『因果經』に「佛成道、初めの一七日に、我が法、妙にして能く受くる者無きを思惟す。二七日に衆生の上中下の根を思惟し、三七日に誰が先に法を聞くべきかを思惟す」とある。

又

智慧德相 奇哉奇哉 敕點龍馬 跛鼈出來

又

智慧德相、奇なる哉、奇なる哉。

龍馬⁽²⁾を敕⁽²⁾點⁽²⁾すれば、跛鼈⁽²⁾出で來たる。

(1) 『仏祖通載』に「清涼澄觀曰く、世尊初め正覺を成じ歎じて曰く、奇なる哉、我れ今、普ねく一切衆生を見るに如来の智慧德相を具有す。但だ妄想執著を以て證得すること能わず」とある。(2) 『五灯会元』に「守廊侍者、徳山に問うて曰く、従上の諸聖、甚摩の処に向つて去る。山曰く、作麼、作麼。師曰く、飛龍馬を敕點すれば、跛鼈出頭し來る。」とある。勅点とは、天子の勅命によって呼出すこと。この二句は、英俊の衲僧を求めたのに期待に反して鈍漢がでてきたの意味。

又

六年冷坐 三七思惟 狹路逢著 汝是阿誰

又

六年の冷坐、三七の思惟。

狹路⁽¹⁾に逢著⁽²⁾す、汝は是れ阿誰⁽³⁾ぞ。

(1)『五灯会元』の楊岐章の慈明との問答に「師問うて曰く。狹路に相逢う時如何ん。明日く、你且く驛避せよ。我れ那裏に去り去るを要す」とある。(2)逢う。出逢う。(3)だれ。

艸座釋迦

未起艸座 現諸威儀 手脚全露 意氣漸衰 聾 稽首人
天大導師

艸座の釈迦

未だ艸座⁽¹⁾を起たず、諸の威儀⁽²⁾を現す。

手脚全く露し、意氣漸く衰う。聾⁽⁴⁾。

稽首⁽⁵⁾す、人天の大導師⁽⁶⁾。

(1)『因果経』に「菩薩は即ち自ら思惟す。過去の諸仏、何を以て座と為して無上道を成ず。即便ち自ら知る。艸を以て座と為す。釈提桓因⁽¹⁾、化して凡人と為し、淨觀艸を執る。菩薩問うて言く、汝、名は何等ぞ。答う吉祥と名づく。又、言く、汝手中の艸、此れ得べきやいなや。此に於て吉祥即ち艸を授け以て菩薩に与う。因つて発願して言く、菩薩道成せば、願いは先づ我を度す、菩薩受け已つて敷いて以て座と為す。艸上に於て結跏趺坐す」とある。(2)威儀のある容儀。『維摩経』の「弟子品」に「滅定を起たずして諸の威儀を現す」とある。(3)氣勢。(4)どうだ。端的を示す語、これだなど。(5)頭を地につけて敬礼する。(6)六道を教導する人。釈迦を言う。

龍女成佛圖

志意和雅 慈悲仁讓 徧照十方 達罪福相 龍神恭敬
天人戴仰 一自往南 絕無此様

龍女成佛の図

志意⁽²⁾和雅⁽³⁾、慈悲仁讓⁽⁴⁾、徧なく十方を照して、罪福の相に達す。龍神恭敬⁽⁵⁾し、天人戴仰⁽⁶⁾す。一たび南に往きし自り、絶えて此の様無し。

(1)『法華経』「提婆品」に出づ。(2)心持ちがやわらかで逆らわないこと。こころざしのおだやかなこと。(3)慈悲深く思いやりのあること。(4)罪惡と福德。(5)龍には神力あるために言う。又、龍王のこと。(6)うやうやしくする。(7)天界に住む者。(8)期待すること。

三教聖人 本朝所謂醉
吸三聖者也

無味也無 早汚其口 依俦醋醬 髣髴醬瓿

三教聖人⁽¹⁾（本朝に謂う所の醉吸の三聖なる者なり）

無味も也た無し、早く其の口を汚す。

醉醬⁽²⁾に依俦⁽³⁾として、醬瓿⁽⁴⁾に髣髴⁽⁵⁾たり。

(1)孔子・老子・釈迦を一幅に画いたもの。三教一致思想より出た図。(2)『翰林五鳳集』五十七に「三人醋を嘗めて斜暉に立つ」の語から醉吸という。ここで言う三聖人は「佛印禪師・蘇東坡・黄魯直」の三人とする。(3)醉のかめ。(4)よく似ている。(5)ひしおのかめ。(6)よく似たさま。

維摩

從癡有愛 衆生無邊 只許汝神力 不許汝默然

維摩⁽¹⁾

癡⁽²⁾に従り、愛有り、衆生は無辺なり。

只だ汝が神力⁽⁴⁾を許し、汝が默然⁽⁵⁾を許さず。

(1) 維摩詰。(2) 『維摩經』の「問疾品」に「癡に従り愛有りて、則ち我れ病生ず」とある。
(3) 三界六道に迷っている衆生は無量無辺である。(4) ふしぎな力。(5) 『維摩經』の「入不二法門品」に「文殊師利、維摩詰に問う、我等各自に説き已る。仁者、當に説くべし。何等か是れ菩薩入不二法門と。時に維摩詰、默然として言無し」とある。

又

請飯借座 滿面慚惶 虎頭下筆 牆壁生光

又

飯を請い、座を借る、滿面の慚惶。

虎頭、筆を下せば、牆壁⁽⁴⁾、光を生ず。

(1) 『維摩經』の「香積品」に「国有り、衆香と名づく。仏を香積と号す。諸の菩薩と方に共に坐して食す。汝往きて彼に到つて我が辭の如く曰え。(中略)願わくは、世尊所食の余を得て、當に娑婆世界に於て佛事を施作す(中略)是に於て香積如来、衆香の鉢を以て香飯を盛満し、化菩薩に与ふ」とある。(2) 『維摩經』の「不思議品」に「維摩詰、文殊師利に問うて言く、仁者無量千萬億阿僧祇の國に遊ぶに何等の仏土にか、好上妙の功德成就せる師子の座有るや。文殊師利言はく、(中略)彼の仏、身長八万四千由旬なり。其の師子の座の高さ八万四千由旬にして嚴飾第一なり。是に於て長者維摩詰、神通力を現するに即時に彼の仏、三万二千の師子座の高広嚴淨なるを遣わして、維摩詰の室に來入せしむ。」とある。(3) はしおそれいる。(4) かこいのかべ。無心で靈性のないものにととる。『金湯編』に「顧愷之、字は長康、小字は虎頭。画に工なり。一日瓦官寺の殿壁に維摩の像を画く。戸を開ければ、光明、寺を照す」とある。

又

毛吞巨海 芥納須彌 古佛既去 文不在茲

又

毛⁽¹⁾、巨海を呑み、芥に須彌を納る。

古仏⁽²⁾、既に去る、文⁽³⁾、茲に在らず。

(1) 『維摩經』の「不思議品」に「維摩詰言わく唯だ舍利弗、諸仏菩薩に解脱あり、不可思議と名づく、若し菩薩、是の解脱に住する者は、須彌の高広を以て芥子の中に内れ、増減する所なく、須彌山王の本相は故の如し。而も四天王は、忉利の諸天、己れの所入を覺えず知らず、唯だ應に度すべき者は、乃ち須彌の芥子の中に入るを見る。是れを不可思議解脱の法門と名づく。又、四大海の水を以て一毛孔に入るも魚鼈鼉水性の属を燒さず、而も彼の大海の本相は故の如し」とある。(2) 維摩詰を金粟如来という。(3) 『論語』中に「文王既に没すれども、茲に在らず」

又

臥疾毗耶 悲生慷慨 好敕文殊 慰彼癡愛

又

疾⁽¹⁾に毗耶に臥す、生を悲しんで慷慨す。

好し、文殊⁽³⁾に敕して、彼の癡愛を慰せしむ。

(1) 『維摩經』の「方便品」に「爾の時、毘耶離大城中に長者有り。維摩詰と名づく。其の方便を以て身に疾有ることを現じ、其の疾を以ての故に」とある。(2) いたみなげくさま。志を失うさま。(3) 『維摩經』の「問疾品」に「爾の時、仏、文殊師利に告ぐ、汝、維摩詰に行詣して疾を問え。(中略)維摩詰言わく、癡従り愛有りて則ち我が病生ず」とある。

又

佛身無爲 法門不二 示疾毗耶 有甚麼事

又

仏身は無為、法門は不二、
疾を爲耶に示す、甚麼の事か有る。

(1)『維摩經』の「弟子品」に「仏身は無爲にして諸数に墮せず」とある。

文殊

佛見法見 前三後三 鐵圍放逐 不容對談

文殊

仏見、法見、前三後三、
鐵圍に放逐して、對談を容れず。

(1)『五灯会元』に「世尊、因に文殊、忽ち仏見法見を起し、世尊をして、威神に鐵圍山に摂向せらる」とある。『因本經』に「四大洲、八萬小洲諸餘大山、須彌山王の外に於て、別に一山有つて名づけて鐵圍と云う」とある。(2)『碧巖錄』三五則に出づ。(3)追いはらう。(4)受け入れないこと。

又

妙德無得 大智不知 鼻孔相似 七佛祖師

又

妙德は無得、大智は不知。
鼻孔、相似たり、七佛の祖師。

(1)文殊菩薩を妙德と言う。『名義集』にある。(2)実体として捉えられぬこと。(3)すぐれた智慧。『名義集』には「文殊は能證の大智を表す」とある。(4)『百丈広録』に「文殊は是れ七仏の祖師」とある。

又

暮雲歸鳥碧層巒 人在金剛窟裏看 稽首智光開五字 三
三前後不相瞞

又

暮雲歸鳥、碧層巒、金剛窟裏に在つて看る。
稽首す、智光の五字を開くことを、三三前後、相瞞せず。

(1)夕ぐれの雲。(2)重なり連なつた山々。(3)文殊を無着文喜が相見問答した所をいう。
(4)印度で最も丁寧な敬礼。(5)智慧の光。(6)『文殊五字心陀羅尼品』のことか。(7)あざむく。

又

師子吼 空花雨來 無端大地絶纖埃 機前逼佛吹毛劒 不
敢等閑掛五臺

又

師子、空に吼えて、花雨來たる、端無く、大地、纖埃を絶す。
機前、仏に逼る吹毛の劒、敢えて等閑に五臺に掛けず。

(1)こまかいちり。(2)ことの起らぬ前(3)『大藏一覽』に「文殊師利、其の念を知り已つて大衆の中に於て刀を把つて仏を害せんとす。(中略)偈を説いて言く、文殊大智士、深く法の源底に達し自ら手に利劒を握つて持して如来の身に逼る。仏も亦た爾」とある。(4)

名剣の称。(5)なおさらに、いいかげんに。(6)五台山のこと。

又

青山萬疊鎖煙嵐 無著今朝來自南 凡聖同居多少衆 不
將前後數二三

又

青山萬疊、煙嵐を鎖す、無著、今朝南自り來たる。
凡聖同居、多少の衆、前後を將つて二三を数えず。

(1)青々と樹木のしげっている山が幾重にもかさなつてつらなっている様。(2)山がすみ。
山になつてもや。(3)凡夫と聖人が同じ所にいる、凡聖一如のこと。(4)前出。

又

五字總持一字無 三三前後謾塗糊 龍宮所化知何許 小
女靈山來獻珠

又

五字の總持、一字も無し、三三前後、謾に塗糊す。
龍宮の所化、知んぬ、何許ぞ、小女、靈山に来て珠を獻ず。

(1)前出 (2)陀羅尼の意識 (3)あいまいにする。ごまかす。 (4)『法華經』の「提婆品」に
「智積菩薩、文殊師利に問う、仁、龍宮に往く、所化の衆生、其の数、幾何ぞ。文殊師利
言く、其の数無量なり。稱計すべからず。口の宣する所に非ず、心の測る所に非ず」とあ
る。(5)『法華經』の「提婆品」に「龍女、一の宝珠有り。価直に三千大千世界なり、持
して以て仏に上る」とある。

普賢

行願未滿 象生六牙 又何太 聞道娑婆說法華

普賢

行願、未だ滿たず、象、六牙を生ず。

又、何んが去る、聞いて道う、娑婆に法華を説くと。

(1)事を成就しようとする誓願。(2)『法華經』の「普賢勸發品」に「是の人、若くは行き、
若しては立ち、此の經を誦誦す、我れ爾の時、六牙の白象王に乗り、大菩薩衆と俱に其の
所に詣で、自ら身を現じ、供養、守護して其の心を安慰せん」とある。(3)『法華經』の
「普賢勸發品」に「世尊、我れ宝威德上王仏の國に於て、遙かに此の娑婆世界に法華經を
説くを聞く」とある。

觀音

黑風吹舩舫 飄墮羅刹國 那時急轉身 念彼觀音力

觀音

黑風、船舫を吹いて、羅刹國に飄墮す。
那時、急に身を転じて、彼の觀音の力を念ぜよ。

(1)『法華經』の「普門品」に出づ。(2)その時。(3)身をかわす。ひるがえす。

又

塞斷耳根 伐卻聞性 鵲噪鴉鳴 欲供觀世音淨聖

又

耳根を塞斷し、聞性を伐却す。

鵲⁽⁴⁾ 噪鴉鳴、觀世音淨聖に供せんと欲す。

(1) 聴覚器官。 (2) ふさがたちきること。 (3) 聴覚器官の能力。 (4) かさがさがさわぎ鳴く。喜びの起る前兆という俗説がある。 (5) からすがなく。 (5) きよらかな聖者。觀世音をいう。

又

大火所燒 大水所漂 險處回首 月在晴霄

又

大火に燒かれ、大水に漂わさる。

險處に首を回らせば、月は晴霄に在り。

(1) 『法華經』の「普門品」に「設い大火に入るも、火、燒くこと能わず。是の菩薩の威神力に由るが故に。若し大水に漂わさるが為に其の名号を稱さば即ち淺處を得」とある。 (2) 晴れわたった空。

又瓶柳
在側

善財不敢出門庭 蹋遍南方百十城 家醜難藏補陀境 春風瓶裏柳枝青

又、(瓶柳、側に在り)

善財、敢えて門庭を出でず、踏遍す、南方百十城。
家醜、藏し難し、補陀の境、春風瓶裏に柳枝青し。

(1) 『華嚴經』の「入法界品」に出る求道の菩薩の名。この童子が生まれる時、室内に自然の財宝が出現したので善財と名づけた。 (2) あまねく歩きまわる。 (3) 『三藏法数』に「文殊、遂に善財をして南方に往かしむ。先ず、徳雲比丘に参じ、次第に展転指示して、終り

普賢菩薩に参す。即ち一切仏刹微塵数の三昧門を得。善財、是の如く一百十城を歴て、五十三の善知識に参す。是を五十三参と爲す」とある。 (4) わが家のみにくさ。 (5) 『華嚴經』の「入法界品」に「南方に山有り、補怛洛伽と名づく。彼に菩薩有つて觀自在と名づく云云」とある。

又右持蓮華
左抱小兒

諸佛同慈 衆生同悲 紅蓮在手 能賺小兒

又、(右に蓮華を持ち、左に小兒を抱く)

諸佛同慈、衆生同悲。

紅蓮、手に在り、能く小兒を賺す。

(1) 『楞嚴經』に「一には、上、十方諸仏の本妙覺心に合つて、仏如来と同一の慈力あり。二には、下、十方一切六道の衆生に合つて、諸の衆生と同一の悲仰あり」とある。慈とは、衆生をいつくしみ、幸福を与える、悲は、衆生の菩薩、苦難、苦境をいう。 (2) 紅色のはすの花。 (3) だましなだめる。

又柳枝
酒水

枝頭滴滴 乃漱乃濯 咄哉觀世音 打濕袈裟角

又、(柳枝、水を酒ぐ)

枝頭滴滴、乃ち漱ぎ、乃ち濯う。
咄哉、觀世音、袈裟角を打濕す。

(1) 一滴一滴。 (2) 溜息をついて歎く詞。「ああ」という意。 (3) ぬらす。しめらす。『五灯会元』の梁山觀禪師の章に「僧問う云々。忽然として傾湫倒嶽の時如何ん。師、座を下つて把住して曰く。却つて老僧が袈裟角を濕さしむること莫れ」とある。

又 柱⁽¹⁾ 頤⁽¹⁾
觀⁽¹⁾ 瀑

聞與無聞 生滅圓離 飛流千尺 隻手柱頤

又 (頤を柱え、瀑を観る)

聞と無聞と、生滅円離す、

飛流千尺、隻手、頤を柱う。

(1)『楞嚴經』に「音声の性に動靜あれば聞の中に無を為す。声無きとき、無聞と号すれども、実に聞の性無きに非ず。声の無きとき、既に滅無し。声の有るとき、亦た生に非ず。生滅二つながら円離せり。是れ則ち常に信実なり」とある。(2)まどかに離れる。(3)勢いよく流れ落ちる。(4)手であごをささえる。

魚藍

畫眉翠黛 滿面春風 放下藍子 鱗鱗化龍

魚藍⁽¹⁾

画眉翠黛、滿面の春風。

藍子を放下すれば、鱗鱗、龍と化す。

(1)魚を入れる竹かご。『三才図会』の中に、南海の観音の図は、女人の相をして、手に魚藍をたずさえている。(2)えがいたまゆ。まゆずみでまゆをえがく。(3)みどり色のまゆずみ。(4)かご。(5)うろこのように、あざやかで美しいさま。

龍福千江老兄和尚手畫觀音大士高乾觀長老請贊月船
禪慧謹拜手替首爲之贊曰

千江水淨 一輪影沈 能畫所畫 向背何尋 嘆 大慈大悲
悲觀世音

龍福の千江老兄和尚、手画の観音大士、高乾の観長老、贊を請

う。月船禪慧、謹んで拜手、稽首し、之が贊と爲して曰く、

千江、水淨く、一輪、影沈む。能画所画、向背、何んぞ尋ねん。嘆。
大慈大悲觀世音。

(1)寺名。詳細不明。(2)ひざまずいて手を地につき、頭を手のところまで下げる礼。稽首も同じ礼。(3)顔を向けたり背けたりする。(4)広大無辺な慈悲を持つ観世音菩薩。

達磨

狼毒之腸 生鐵之面 手脚未彰 半身先現

達磨

狼毒の腸、生鐵の面。

手脚、未だ彰れず、半身、先づ現す。

(1)狼も殺す毒。(2)まじりけのない鉄。(3)手と足

又

揚子江空 少林月冷 纔趨雪庭 隻覆過嶺

又

揚子江空しく、少林、月冷かなり。

纔かに雪庭に趨れば、隻履、嶺を過ぐ。

(1)中国に流れる川。達磨が印度より揚子江を渡って少林寺に到るといふ。

又

積雪過膝 輕心慢心 面壁年老 高寒難禁

又

積雪⁽¹⁾、膝を過ぐ、輕心慢心。

面壁、年老いて、高寒、禁え難し。

(1)『伝灯録』の「達磨章」に「十二月九日の夜、天大いに雪を雨ふらす。神光、堅く立つて動ぜず。遅明、積雪し、膝を過ぐ。師憫んで問うて曰く、汝久しく雪中に立つて当に何んの事をか求むべき。光悲涙して曰く、惟だ願わくは、和尚慈悲して、甘露の門を開き、広く群品を度したまえ。師曰く、諸佛の無上の妙道、曠却に精勤して行き難きを能く行き、忍びがたきを而も忍ぶ。豈に小徳小智、輕心慢心を以て真乗を冀わんと欲さば、從うに勤苦を勞せんや。」とある。

又

九年面壁 空腹高心 誰在門外 積雪轉滾

又

九年の面壁、空腹高心⁽¹⁾。

誰か門外に在る、積雪、転た深し⁽²⁾。

(1)『続灯録』の慈明円章に「僧問う、達磨、九年面壁の意旨如何ん。師曰く、空腹高心」とある。腹の中が充たされていないのに、いかにも充ちているような顔をする。修行も心境も十分でないのに悟り顔をすること。(2)いよいよ。ますます。

又

至人不遙 眼睛突出 容易趨庭 積雪過膝

又

至人⁽¹⁾、遙かならず、眼睛突出す。

容易に庭に趨れば⁽²⁾、積雪、膝を過ぐ。

(1)『伝灯録』の達磨章に「僧の神光なる者有り、曰く、近く聞く、達磨大士、少林に住止すと。至人遙かならず。当に玄境に造るべし。乃ち彼に往きて晨夕参承す。師、常に端坐して、牆に面す、誨励を聞くこと莫れ」とある。(2)子が父から教訓を受けること。孔子の子、鯉が庭さきを小走りに通ったとき、そこにいた孔子から『詩経』の学ぶべきことを教えられた故事。

又

一葦渡江 隻履過嶺 東土西天 追迹認影

又

一葦⁽¹⁾、江を渡り、隻履⁽²⁾、嶺を過ぐ。

東土西天、迹を追い影を認む。

(1)蘆葉の達磨の故事。(2)隻履の達磨の故事。

又

一葦過揚子 九年坐少林 相逢不相識 明月落波心

又

一葦、揚子を過ぎ、九年、少林に坐す。

相逢うて相識らず、明月、波心⁽¹⁾に落つ。

(1)波のまんなか。

又

一華開五葉 傳法救群迷 搔首風前立 祖師不自西

又

一華開五葉、法を伝え、群迷を救う。⁽¹⁾
首を搔いて風前に立つ、祖師、西よりせず。⁽³⁾

(1)『伝灯録』の達磨章の伝法偈に「吾れ本と茲の土に來つて法を伝え、迷情を救う。一華五葉に開き、結果自然に成る」にある。⁽²⁾衆生のこと。⁽³⁾頭をかく。心の落ち着かないときのさま。

又

一葦過揚子 隻履瘞熊耳 鼠口拔象牙 欲補汝缺齒

又

一葦、揚子を過ぎ、隻履、熊耳に瘞む。⁽¹⁾
鼠口に象牙を抜いて、汝が缺齒を補わんと欲す。⁽²⁾

(1)阿南省にある山。達磨を葬つた所。⁽²⁾『仏光録』に「老鼠の口中に象牙無し」の句がある。⁽³⁾達磨は齒が欠けていたという伝聞。

又

眼睛活 鼻孔垂 咄咄咄 空相思 喚來與老僧洗脚 非
驢非馬非祖師 只許你會 不許你知

又

眼睛活し、鼻孔垂る。⁽¹⁾咄咄咄。空しく相思う。⁽²⁾喚び來らせ、老僧が与に洗脚せしめん。⁽³⁾驢に非ず、馬に非ず、祖師に非ず、只だ你会を許

す、あなたが知を許さず。

(1)目の玉。(2)鼻。(3)叱と同じ。したうちの声。文詞の尽し難い所に用いる。(4)『碧巖録』第一則の頌にあり。(5)『碧巖録』第一則の評唱をうけた語。

又

不來東土不西歸 一對眼睛面上輝 闍國相追又相憶 豈
堪殘月扣幽扉

又

東土に來らず、西歸せず、一對の眼睛、面上に輝く。
闍國相追ひ、又相憶う、豈に残月の幽扉を扣くに堪えんや。

(1)『碧巖録』第一則の頌に「闍國の人追うも再來せず、千古万古しく相憶う」とある。

又

西天十萬八千里 寒暑三周未到東 髣髴夜來盈尺雪 從
佗兒子立庭中

又

西天十萬八千里、寒暑三周、未だ東に到らず。髣髴たり、夜來盈尺
の雪、從佗あれ、兒子の庭中に立つことを。⁽¹⁾

(1)『伝灯録』の報恩明章に「僧問う、如何なるか是れ西來意。師曰く、十萬八千、真に跋涉す。直下に西來し、東に到らず」とある。(2)『伝灯録』の達磨章に、「師、重溟に汎う、凡そ三周の寒暑にして南海に達す。梁の普通八年丁未の歲、九月二十一日なり」とある。(3)ほのか。はつきりしないさま。(4)たくさん雪。(5)從來「さもあらばあれ」

と読んでいるが、今日では誤りとされている。「たとい」「他のすにに従す」

又

一箇葬在熊耳 一箇攜履夜走 若謂一點水墨兩處成龍
勸君更盡一盃酒

又

一箇は、熊耳⁽¹⁾に葬在し、一箇は、履を攜えて夜走る。若し⁽²⁾一点の水墨、
兩處に龍と成ると謂わば、君に⁽³⁾勧む、更に一盃の酒を尽せ。

(1) 達磨を葬った熊耳山のこと。

(2) 『五灯会元』の黃龍明の章に「黃龍明禪師、胡巡檢と公安の二聖に到る。胡問う、達磨、梁の武帝に對えて曰く、廓然無聖と。公安、甚磨と為してか却つて二聖有るや。師曰く、一点の水墨、兩處に龍と成る」とある。又、『事文類聚』に「帳僧繚、金陵の安樂寺に於て兩龍を画く。睛を点せず。毎に云く、之を点せば飛び去らん。人以て誕妄なりと為す。因つて其の一に点す。須臾に雷電壁を破り、一龍、天に上る。一龍の睛を点ぜざる者、見に在る。」とある。

(3) 王維の詩。

又

廓然無聖無功德 馬面牛頭謁帝王 少室峰前雪過膝 還
云分髓付神光

又

廓然無聖、無功德、馬面、牛頭、帝王⁽²⁾に謁す。
少室峰前、雪膝を過ぐ、還た云う、髓⁽⁴⁾を分つて神光に付すと。

(1) 『碧巖錄』第一則に出づ。

(2) 武帝を言う。

(3) 『広輿記』に「河南府嵩の東を太室と

曰い、西を少室と曰い、少林寺に在り。云々」とある。

(4) 達磨の皮肉骨髓の喩え。『伝灯

録』の達磨章に出づ。

又

折蘆北渡 攜履西還 捉得捉得 面皮最頑

又

蘆を折つて北に渡り、履を攜えて西に還る。捉得⁽¹⁾、捉得⁽²⁾、面皮、最も
頑なり。

(1) 『五家正宗贊』の達磨章に「蘆を折つて江を渡つて少林に至る」とある。

(2) つらの皮。

又

聖諦廓然何所標 相逢胡漢不同條 孤鴻啼斷空江月 梁
主休言更去招

又

聖諦⁽¹⁾廓然、何んの所標ぞ、相逢⁽²⁾う胡漢、同条ならず。
孤鴻啼⁽⁵⁾き斷ず、空江の月、梁主⁽⁶⁾、言うことを休めよ、更に去つて招か
んと。

(1) 聖人の悟った真理。

(2) からりと開けたさま。

(3) 『円覚經』に「修多羅の教は、月を標す指の如し。若し復た月を見れば、所標は畢竟して月に非ざることを了知す」とある。

(4) 胡とは中国以外の国をさして、中国人が用いた蔑称。漢は、中国人が自国民をさす自称。野蠻人と文明人の意。

(5) むれをはなれた一羽のおおとり。(雁の一種)

(6) 白雲守端の頌の句。

又

棲棲泛江 兀兀面壁 雪冷風寒 何當辨的

又

棲棲⁽¹⁾として江に泛^うかぶ、兀兀⁽²⁾として壁に面う。
雪冷やかに風寒し、何んぞ⁽³⁾当に的を辨すべき。

(1) 落ち着かないさま。忙しいさま。(2) 一心不乱に努力するさま。動かないさま。(3) 『碧巖録』第一則の頌に出づ。的は端的。

又

東土西天無祖師 普通年遠業風吹 夜來少室峯前雪 埋
卻渾身總不知

又

東土西天、祖師無し、普通⁽²⁾、年遠、業風吹く。
夜來、少室峯前の雪、渾身⁽³⁾を埋却するも、總に知らず。

(1) 中国と印土。(2) 達磨の中国渡来の年号。(3) からだ全体。全身。

又

觀音大士 傳佛心印 隻履西歸 不得其信

又

觀音大士、佛心印を伝う。隻履、西に帰って、其の信を得ず。

(1) 『碧巖録』の第一則に「達磨遂に江を渡つて魏に至る。帝後に挙して誌公に問う。誌公

云く、陛下還つて(還た)此の人を識るや否や。帝云く、不識。誌公云く、此は是れ觀音大士、仏心印を伝う」とある。

又

隻履西歸 一華東布 後代兒孫 證烏作鷺

又

隻履、西に帰り、一華⁽¹⁾、東に布く。後代の兒孫、烏を證して鷺を作す。

(1) 「一華五葉」。達磨の伝法偈の意。(2) 「烏寫馬と成る」と同じ意味。

又

指心見性 數偶毒藥 斷臂得卻 一杭埋卻

又

指心見性、數々⁽¹⁾毒藥に遇う。斷臂⁽²⁾得隨、一杭に埋却す。

(1) 『伝灯録』の達磨章に「時に魏氏、釈に奉じて禪雋林の如し。光統律師、流支三藏は乃ち僧中の鸞鳳なり。師の道を演ぶに相を斥け心を指すを覩て、毎に師と論議して是非の蜂起す。師、退かに玄風を振つて普なく法雨を施す。而も偏局の量、自ら堪任せず。競つて害心を起して数々毒藥を加う」とある。(2) 二祖慧可の斷臂求法の喩。

又

栖栖復栖栖 歸來坐少室 無暇分皮髓 全身棺裏失

又

栖栖⁽¹⁾復た栖栖、歸り来つて少室に坐す。
皮髓⁽²⁾を分つに暇無し⁽³⁾、全身棺裏に失す。

(1) 落ち着かないさま。忙しいさま。(2) 「皮肉骨髓」の喩をうけた語。(3) 『伝灯録』の達磨章に「魏の宋雲、使いを西域に奉つて廻る。師に葱嶺に遇う。手に隻履を携えて翻々として独り逝くを見る。雲問う、師何れに往く。師曰く、西天に去る」とある。

又

一過葱嶺 天竺茫茫 頼有隻履 欲獻我皇

又

一たび葱嶺を過れば、天竺茫茫、頼いに隻履有り、我が皇に獻ぜんと欲す。

(1) 『西域記』に「葱嶺は、瞻部洲の中に拠る。東西南北各々の数千里、崖嶺数百重、幽谷險峻、恒に冰雪を積む。寒風飈烈多く、葱を出す。故に葱嶺と謂う」とある。(2) 『晋書』の「樂志」に「疊々たる我が皇、天に配し光を垂る」とある。

又

説箇直指 早是迂曲 死盡活人 分張皮肉

又

箇の直指と説くも、早や是れ迂曲、活人を死尽して、皮肉を分張す。

(1) 『無門関』に「箇の直指と説くも、已に是れ迂曲」とある。(2) 曲りくねっている。(3) 中峰明本の頌に「皮肉骨髓を分張して、人をして路、不平を見せしむ」とある。

又

大破六宗 單傳一印 印刹無文 舉世不信

又

(1) 大いに六宗を破し、一印を伝う。印刹(2)れて文無し、世を挙げて信ぜず。

(1) 『伝灯録』の達磨章に「時に二師有り。一には仏大先と名づけ、二には仏大勝多と名づく。本と師と同じく仏陀跋陀に小乗の禪觀を学ぶ。仏大先、既に般若多羅尊者に遇う。小を捨て大に趣りて師と化を並ぶ。時に二甘露門と号す。仏大勝多、更に途を分つて六宗と爲す。第一有相宗、第二無相宗、第三定慧宗、第四戒行宗、第五無得宗、第六寂靜宗なり。各々の已解を封じて別に化源を展ぶ。聚落崢嶸して徒衆甚だ盛んなり。大師、喟然として歎じて曰く、彼の一師、已に牛跡に陷つ。洗んや復た支離繁盛にして六宗を分つ。我れ若し除かざれば、永く邪見に纏われん。言已に微く、神力を現す、第一有相宗の所に至る。(六宗を破す語省略) 既にして六衆或く誓つて帰依す」とある。(2) 『漢書』の韓信伝に「印を刻んで利れども、忍んで予うるに能わず」とある。(3) 『法華経』の「從地涌出品」に「世を挙げて信ぜらる所」の語がある。

又手持楞伽

諸佛法印 匪從人得 爲有斯經 栖栖去國

又(手に楞伽を持つ)

(1) 諸佛の法印、人に従つて得るに匪ず。斯の経有るが為に、栖栖(2)として国を去る。

(1) 『伝灯録』の達磨章に出づ。(2) 『碧巖録』第六十七則の頌に「當時、志公老を得ずんば也た是れ栖栖として国を去る人ならん」とある。

又渡蘆

廓然無聖 對朕者誰 胸衣蘆葉秋江冷 莫是栖栖去國時

又(渡蘆)

(1) 廓然無聖、朕に対する者は誰ぞ。胸衣(2)蘆葉、秋江冷やかなり、是れ栖

栖として国を去る時なること莫しや。

(1)『碧巖録』第一則に出づ。(2)『名義集』に「屈陶此には大細布と云う。木綿華心を絹いで織り成す。其の色、青黒く、即ち達磨所伝の袈裟なり」とある。

又

何等家私 單傳直指 一葦過江 當門無齒

又

何等の家私ぞ、單傳直指。一葦江を過ぎれば、當門齒無し。

(1)家財。財産。転じて家風。(2)直指單傳、じかに指し示し端的に伝えること。

又

遙遙一葦泛江隈 盡力風前喚不同 夜雨梧桐秋半過 梁王長在鳳凰臺

又

遙遙たる一葦、江隈に泛かぶ、力を尽して風前、喚べども回らず。夜雨梧桐、秋半ば過ぐ、梁王は長く鳳凰臺に在り。

(1)はるかに遠くはなれたさま。(2)揚子江の曲りこんだ所。(3)『南史』の「梁武本紀」に「高祖武皇帝、諱は衍、字は叔達、小字は練兒、南蘭陵中、都の人なり。姓は、蕭氏、齊と同じく五世の祖、齊に仕え梁王に封じ、和帝宝融の禪を受く。皇帝の位に即す。」とある。

又

一葦何之 闔國人追 命根未斷 分髓分皮

又

一葦、何んが之く、闔国人追う。命根未だ断ぜず、髓を分ち、皮を分つ。

(1)国じゅうの人。(2)寿命、生命そのものの意。

又 兆殿司圖

此心擬向那邊安 揚子江頭蘆葦寒 錯爲兆公被描貌 全身現出一毫端

又(兆殿司の図)

此の心、那邊に向つて安んぜんと擬す、揚子江頭、蘆葦寒し。錯つて兆公の為に描貌せられ、全身現出す、一毫端。

(1)吉山明兆。画を李竜眼に学び、法は大道一似を嗣ぐ。終身、殿司の位にあつたので兆殿司という。(2)『正韻』に「人物を描画して、其の状に類するを貌と曰う」とある。

又 身背

無面目漢 壁觀恂恂 神光來也 急須轉身

又(背身)

無面目の漢、壁觀恂恂、神光來るや、急に須らく轉身すべし。

(1)真心のあるさま。つつしみ深いさま。(2)『五灯会元』に「二祖慧可大師は武牢の人なり(中略)洛陽龍門の香山に抵つて宝静禪師に依つて出家し、終日宴坐す。八歳を経て寂黙の中に於て條ち一神人を見て謂つて曰く將に果をして受けんと欲す。何んぞ此に滞らんや。大道遥かなるに匪ず。汝其れ南せよ。祖、神助なるを知つて因つて改めて神光と名づ

く、其の師曰く、神、汝をして南せしむる者は、斯れ則ち小林の達磨大士、必ず汝の師なり」とある。

又

混沌學壁觀 九年坐儻侗 借手立雪人 暗中摸鼻孔

又

混沌⁽¹⁾、壁觀を学ぶ、九年坐して儻侗⁽²⁾、手を雪に立つ人に借りて、暗中に鼻孔を摸らしむ。

(1)天地がまだ分れないさま。ぼんやりとして何も知らないさま。(2)できあがらない。完成していない。

二祖

無所知處 了了常知 庭雪盈尺 得髓者誰

二祖

所知無き處、了了⁽¹⁾として常に知る。庭雪、尺に盈つ、髓を得る者は誰ぞ。

(1)『伝灯録』の達磨章に「慧可曰く、我已に諸縁を息む、師曰く、断滅を成じ去らざる」と莫しや否や。可曰く断滅を成ぜず。師曰く、何ぞ以て験として断滅せずと云う。可曰く、了了として常に知るが故に、之を言えども及ぶ可からず」とある。又『宋鏡録』に「了了として知れども所知無し」とある。

四睡

睡熟不掩 人斑虎斑 一嘯風起 萬里朱殷

四睡⁽¹⁾

睡り熟して掩^{おお}わず、人斑虎斑。一嘯風起れば、万里朱殷⁽³⁾。

(1)豊干、寒山、拾得が虎と抱交して睡る図を言うときれている。(2)虎の皮のまよう。斑はまだら、色のまじわることなどの意。(3)赤黒い色。幾日も経た血のような色。

又

睡美不知 満山風雨 將謂諸聖來現 出林猛獸大怒

又

睡り美⁽¹⁾にして知らず、満山の風雨、將に謂えり、諸聖来り現すと、林を出る猛獸大いに怒る。

(1)こちよい。(2)六朝以来の俗語。いつも思い違いをする。いつも誤解する。

又

同流異類 鬪頭打睡 低聲低聲 腥風滿地

又

同流異類、頭を鬪⁽³⁾わしめて打睡⁽⁴⁾。低声低声、腥風地に満つ。

(1)同じ血すじ。同じ流派。(2)種族や風俗の違う人種。(3)接し合う。あつまる。(4)ねむること。又うたた寝すること。(5)小声で言うこと。声を制する語。(6)なまぐさい風。殺伐の気。

又

癡頑能相聚 與大蟲爲伍 那箇夢先醒 江山日正午

又

癡頑⁽¹⁾、能く相聚まる、大蟲⁽²⁾と伍を為す。那箇か夢、先づ醒む、江山、日正に午。

(1) おろかで頭のにぶいもの。(2) 蟲は獸。虎のこと。機鋒の鋭い禪者に喩える。(3) くみ。なま。

又

朝睡暮睡 無他無自 若又舉頭 一棒打出

又

朝睡暮睡、他無く自無し。若し又頭を拳^こせば、一棒に打出⁽¹⁾せん。

(1) 追い出すこと。

豐干

萬德不將來 與誰遊五臺 虎威難近傍 一嘯起風雷

豐干⁽¹⁾

萬德⁽²⁾將^もち来らず、誰と与^{なめ}にか五臺⁽³⁾に遊ばん。虎威、近傍し難し、一嘯、風雷起る。

(1) 『伝灯録』豐干章に「天台豐干禪師は、何許れの人かを知らず。天台国清寺に居す。髪を剪り、眉を齊しくし、布裘を衣る。人或は仏理を問えば止だ隨時の二字を答う。嘗て唱道歌を誦して虎に乗り松門に入る」とある。(2) 『伝灯録』の豐干章に「一日寒山問う、古鏡未だ磨せず、如何んが昭燭せん。師曰く、冰壺影像無く猿猴水月を探る。曰く此は是れ昭燭せず。更に請う師道え。師曰く、萬德將^もち来らず、我をして什麼とか道わしめん。寒拾俱に礼拝す」とある。(3) 五台山のこと。

寒山

看經不識義 標月未⁽¹⁾捻指 捉得捉得 何等面觜

寒山⁽¹⁾

經を看じて義を識らず、月を標して未だ指を忘せず。捉得⁽²⁾捉得、何等の面觜ぞ。

(1) 『伝灯録』二十七に「天台寒山子は、本と氏族無し。始め豊稟の西七十里に寒明の二巖有り。其の寒巖の中に於て居止すると以て名を得。容貌枯悴、布襦零落、樺皮を以て冠と為す。大木履を曳く」とある。(2) つかむこと。領得すること。

又

落花芳艸 天台春老 誰子嬉嬉 終日把掃

又

落花芳艸、天台春老ゆ、誰が子ぞ。嬉嬉⁽¹⁾として、終日把掃す。

(1) 喜び楽しむさま。喜んだ時の発する声。『五灯会元』の仏灯珣禪師の章に「君見ずや、寒山老、終日嬉嬉として長年把掃す」とある。

又

咄哉咄哉 三界輪廻 齋後鐘沈餘菜滓 竹筒攜自國清來

又

咄哉咄哉、三界輪廻。齋後、鐘沈⁽²⁾んで菜滓⁽³⁾余る、竹筒携⁽⁴⁾えて国清^よ自り来る。

(1)溜息をついて歎く詞。(2)落ち着いている。静か。(3)おかずののこり。(4)『寒山詩』の序に「拾得、国清寺に在って食堂を知る。尋常、余残の菜滓を竹筒の内に収貯し、寒山若し来れば即ち負わし去る」とある。

拾得

天台霞色秀 峨嵋山月新 動著茗帚 萬里風塵

拾得⁽¹⁾

天台霞色秀いで、峨嵋山月新たなり。茗帚を動著すれば、萬里風塵。

(1)『伝灯録』二十七に「天台拾得は、名氏を言わず。因に豐干禪師、山中に径行して、赤城の道の側に至る。児の啼声を聞く。遂に之を尋ねるに一子を見る。数歳ばかり。初め牧牛子と謂う。之を問うに及んで云く、弧にして此に棄ると。豐干乃ち名づけて拾得と為す。」とある。(2)四川省にある山。山頂に光相寺があり、普賢菩薩の靈場として有名。中国三山の一。(3)葦などの穂でできたぼうき。

寒山拾得同軸

擲帚拋經 圖箇什麼 鐘動國清 白雲朵朵

寒山拾得同軸

帚を擲ち、經を拋つ、箇の什麼をか図る。鐘、国清に動く、白雲朵朵⁽¹⁾。

(1)多くの枝葉、果実のたれ下っているさま。白雲がたちこめている様をいう。

又

五臺雲散 峨嵋月懸 國清寺裏裏 偷僧飯 滿肚喫來只麼眠

又

五臺、雲散じ、峨嵋、月懸る。国清寺裏、僧飯を偷んで、滿肚に喫し來つて只麼に眠る。

(1)はらいっぱい。(2)ただだけの意味。

又

者邊普賢 那邊文殊 更有一箇 天台山國清寺裏東壁上 葫蘆

又

者邊は普賢、那邊は文殊。更に一箇有り、天台山国清寺裏、東壁上の葫蘆。

(1)ここ。こちら。近い場所を示す代名詞。(2)あちら。そこ。(3)『趙州録』に「僧問う、如何なるか是れ祖師西來意、東壁上に葫蘆を掛くこと多少の時ぞや」とある。(4)ひょうたん。転身自在の意。

又

一箇大行薩埵 一箇七佛祖師 何以爲驗 獎帚殘經落韻 詩

又

一箇は大行の薩埵、一箇は七佛の祖師。何を以て驗と為さん、獎帚殘經、落韻の詩。

(1)菩薩の修行のこと。(2)有情、衆生。生存するものの総称。(3)過去七佛のこと。(4)こわれたぼうき。

又

把梵書看 支竹帚息 峨嵋及五臺 十年歸不得

又

梵書を把みつて看、竹帚を支えて息みう。峨嵋及び五臺、十年帰(1)えること得ず。

(1)『寒山詩』に「十年帰(1)ることを得(1)ざれば、來時の路を忘却す」とある。

又

梵書在手兮左卷右舒 秃帚隨身分 東搖西掃 峨嵋掛半輪秋 五臺失來時道 咦 天上人間不可討

又

梵書手に在り、左卷右舒、秃帚身に隨(1)う、東搖西掃。峨嵋、半輪の秋を掛け、五臺、來時の道を失(2)す。咦。天上人間、討(3)ねべからず。

(1)左に巻き、右にひろげる。とじたりひらいたりすること。(2)ほうきを左右に動かすこと。(3)峨嵋山。普賢の靈場。文殊の五台山、觀音の普陀山を中国の三山という。

又寒山手展梵夾
拾得笏觀之

何等文字 牛皮須穿 毫釐生見 鐵圍那邊

又(寒山手に梵書を展べ、拾得旁に之を觀うかがふ)

何等の文字ぞ、牛皮、須(1)らく穿つべし。毫釐も見を生(2)ずれば、鐵圍那邊(3)(4)。

(1)牛の皮でさえ間違(1)いなく穴があくことになる。『五灯会元』の寒山章に出づ。(2)わずか。極めてずかなものの形容。(3)鐵圍山。(4)あちらがわ。

布袋和尚

兜率閻浮 分身百億 咦 莫是彌勒

(1)布袋和尚

兜率閻浮、分身百億。咦 是れ弥勒なること莫(2)しや。

(1)『伝灯録』二七卷に出づ。浙江省の人。契此と自称す。(2)兜率天。意識は知足妙足・喜樂。六欲天の一。(3)閻浮提。意識は穢洲、勝金洲。印度の想像上の地名。(4)布袋和尚の遺偈に「彌勒は眞の彌勒、分身千百億、時々、時の人に示す。時の人自ら識らず」とある。

又

來自率陀天 囊中只麼羶 待人街上立 欲索一文錢

又

率陀天(1)自り來る、囊中、只麼(2)に羶し、人を待て、街上に立つ。一文錢を索(3)わんと欲す。

(1)ただうだけ。(2)なまぐさい。(3)『伝灯録』の布袋章に「師、街衢に在(1)つて立つ。僧有りて問う、和尚、這裏に在(2)つて什麼をか作す。師曰く、箇の人を等(3)つ。曰く、來也來也。師曰く、汝是れ這箇の人にあら(4)ず。曰く如何なるか是れ這箇の人。師曰く、我れに一文錢を乞(5)う」とある。

又倚舷對水月

心心是佛 水中撈月 無底布囊 全身出沒

又(舷に倚り、水月に対す)
心心、是れ佛、水中に月を撈う。無底の布囊、全身出沒。

(1)『伝灯録』の布袋章に「只箇の心、心心是れ佛、十方世界最も靈物」とある。(2)『證道歌』に「水中に月を捉え、争でか拈得せん」とある。(3)からだ全体が出入りしている。

猪頭和尚

衣錦食猪肉 鼻孔何髣髴 寧爲徐姉夫 莫作定光佛

猪頭和尚⁽¹⁾

錦を衣て、猪肉を食らう、鼻孔何んぞ髣髴たる。

寧ろ徐姉夫と為るも、定光佛と作ること莫れ。

(1)『仏祖統紀』に出づ「夔州の沙門、志徐氏、錦衣で喜んで猪頭を食う。人の灾祥を言うに驗せざる無し。人を呼んで小舅と爲す。自ら号して徐姉夫と曰う。一日、三衢の吉祥寺に坐化す。遺言す、吾は是れ定光佛なりと。是に至って真身を奉り、祈禱す。神応歎まず、世に之を猪頭和尚と目す」とある。

栽松道者

饅頭帶雨 株株手栽 雙峰春老 遲汝再來

栽松道者⁽¹⁾

饅頭、雨を帯び、株株、手から栽ゆ。

雙峰、春老う、汝が再来を遅つ。

(1)中国禪宗の五世、大満弘忍よ別名。出生の因縁によって名づく。弘忍は前世において破頭山の栽松道者で、かつて四祖道信に法道を聞こうとしたが、高齢のため許されなかった。弘忍は一女に託胎して出生し、七才にして四祖に謁し、ついに五祖となったという。(2)四

祖の住した所。

又

春老株株碧 雙峰帶雨栽 若無浣紗女 不免入驢胎

又

春老いて株株碧なり、雙峰、雨を帯びて栽ゆ。

若し浣紗の女無くんば、免がれず、驢胎に入ることを。

(1)『五灯会元』に「廻ち去って水辺に行き、一女子の衣を浣うを見る。揖して曰く、寄宿するを得んや否や」とある。

五祖送慧能

不知此山路 相隨至古渡 江空一葦輕 弟子合搖舡

五祖、慧能を送る

此の山路を知らず。相隨つて古渡に至る。

江空しくして、一葦輕し、弟子、合に舡を揺すべし。

(1)『六祖壇經』に「慧能、三更に衣鉢を領得して云く、能は本と是れ南中の人、素より此の山路を知らず。如何んが江口に出だし得ん。五祖云く、汝、憂うべからず、吾れ自ら汝を送る。祖、相送つて直に九江駅に至り船に上らしむ。五祖、舡み把つて自ら揺す。慧能言く、請う、和尚坐せよ。弟子、合に舡を揺すべし」とある。

六祖踏碓

腰石如山 踏碓幾月 米熟欠篩 粃糠埒埒

六祖(碓を踏む)

腰石、山の如し、踏碓幾月ぞ。⁽¹⁾
米熟し、篩を欠く、糝糠埤埤。⁽³⁾⁽⁴⁾

(1)『六祖壇經』に「石を腰にして米を舂く」とあり、慧能は身が小さいため石を腰につけて臼で米をついたと言われている。(2)同じく「碓を踏むこと八箇余月」とある。(3)同じく「五祖問うて曰く、米熟すや也た未だしや。能曰く、米熟すること久し、猶お篩を欠くこと有り」とある。(4)チリの起る形容。

又

已不知字 何能解義 黄梅碓頭 清風匝地

又

已に字を知らず、何んぞ能く義を解せん。⁽¹⁾

黄梅碓頭、清風匝地。⁽²⁾

(1)『六祖壇經』に「尼の無尽蔵は即ち志略が姑なり。常に涅槃經を読む。師暫く之を聴き、即ち為に其の義を解説す。尼遂に卷を執り字を問う。師曰く、字は即ち識らず、義は即ち請う、問え、尼曰く、字尚お識らず、焉んぞ能く義を解すや」とある。(2)湖北省東南端の都市、五祖の根拠地であり、六祖に衣鉢伝受の地。

又 擔

獼獠無智 作息幾時 糝糠未脱 擔杵何之

又 (擔杵)

獼獠無智、作息、幾時ぞ。⁽¹⁾⁽²⁾

糝糠、未だ脱せず、杵を擔いで、何んが之く。⁽³⁾

(1)未開の地の人を罵る語。野蠻人。『六祖壇經』に出づ。(2)『古詩』の「擊壤歌」に「日

出でて作し、日入りて息う」による。(3)しいなど、ぬか。

又

斫倒菩提樹 打摧明鏡臺 杵頭猶有柄 擔荷去還來

又

菩提樹を斫倒し、明鏡臺を打摧す。⁽¹⁾

杵頭、猶柄有り、擔荷して去つて還た来る。

(1)神秀の偈に「身は是れ菩提樹、心は明鏡台の如し、時々勤めて拂拭して塵埃を惹かしむこと勿れ」とあり、これに対して慧能の偈に「菩提本と樹無し、明鏡亦台に非ず、本来無一物、何れの処に塵埃を惹かんや」とある。

又 擔 柴

賣柴獼獠 鬧市彷徨 容易側耳 般若金剛

又 (柴を擔う)

売柴の獼獠、鬧市に彷徨す。⁽¹⁾

容易に耳を側つ、般若金剛。

(1)『六祖壇經』の中に「慧能、艱辛貧乏し、市に於て柴を売る。時に一客の經を誦するを見る。慧能一たび經の語を聞く。心即ち開悟す。遂に客に問う、何んの經をか誦す。客曰く、金剛經。復た問う何れの所従り来つて此の經典を持す。客曰く、我れ新州黄梅県の東禪寺従り来たる。其の寺は是れ五祖の忍大師、彼に在つて化を主とす」とある。

又 確坊 唯 有 杵 臼 不 見 祖 師

咄箇獼獠 不在確坊 七百高僧趁無跡 九江一葦水茫茫

又（碓坊、唯だ杵臼のみ有って、祖師を見ず）

咄、箇の獺、碓坊に在らず。

七百の高僧、趁うに跡無し、九江一葦、水茫茫⁽³⁾。

(1)『伝灯録』の「五祖弘忍章」に「時に全下七百余僧」とある。
(2)洞庭湖の旧名。
(3)ひろびろとして果てしないさま。

懶瓚

十年宰相 多慮多言 煨芋漸熟 不起謝恩

懶瓚⁽¹⁾

十年の宰相、多慮多言。

煨芋、漸く熟す、起きて恩を謝せず。

(1)『碧巖録』三四則の評唱に「懶瓚和尚、衡山の石室の中に隠居す。唐の肅宗、其の名を聞き、使を遣して之を召す。使者其の室に至って宣言す。天子詔有り、尊者当に起って恩を謝すべし。瓚方に牛糞の火を撥て、煨芋を尋りて食すに、寒涕、頤に垂れて、未だ嘗て答えず。使者笑つて曰く、且は勸む、尊者涕を拭え。瓚曰く、我豈に俗人の為に涕を拭う工夫有らん。竟に起たず。使回つて奏す」とある。(2)『宋高僧伝』の懶瓚章に「李公に謂つて曰く、慎しんで多言すること勿れ、十年の宰相を領取せん。李拜して退く」とある。

又

糞火芋熟 何物活計 俗子在門 及早拭涕

又

糞火芋熟す、何物の活計⁽¹⁾ぞ。

俗子門に在り、早く涕を拭くに及べ。

(1)なりわい。生計。思量すること。分別すること。

又

衆僧營作 我則晏如 煨芋未熟 紫鳳銜書

又

衆僧は營作し、我れは則ち晏如⁽¹⁾。

煨芋、未だ熟せず、紫鳳、書を銜む⁽²⁾。

(1)安らかで落ち着いているさま。
(2)ふくむ。口にふくむ。

馬祖扭百丈鼻頭

人在艸窠 野鴨飛過 扭翻鼻孔 阿哪阿哪

馬祖、百丈の鼻孔を扭^{ねじ}る

人は、艸窠に在り、野鴨飛び過ぐ。

鼻孔を扭翻す。阿哪阿哪⁽²⁾。

(1)『碧巖録』五十三則「百丈野鴨子」に「馬大師百丈と行く次で、野鴨子の飛び過ぐるを見る。大師曰く、是れ什麼ぞ。丈云く、什麼の処に去るや。丈云く、飛び過ぎ去る。大師、遂に百丈の鼻頭を扭る。丈忍痛の声を作す。大師曰く、何ぞ曾て飛び去らん」とある。
(2)意表を突かれた時に発する「おやつ」という驚きの声のこと。意外の意味をもつ。

又

昨日鼻頭痛 今朝又不痛 從此江西

謾名模 楚鷄卻是丹山鳳

又

昨日⁽¹⁾の鼻頭痛し、今朝、又痛からず。

此れ従り江西、謾に名模す、楚鷄、却つて是れ丹山の鳳。

(1)『五灯会元』の百丈章に「師曰く、昨日和尚に鼻頭み扭得せられ、痛し。祖曰く、汝昨日甚麼の処に向つて心を留む。師曰く、鼻頭今日又痛からざるなり。祖曰く、汝、深く昨日の事を明す。師作礼して退く」とある。

(上巻終り)